



セレスタン・フレネによる学習文庫の変遷 : 1932-54年を中心に

枝廣, 直樹

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 18(2):43-48

(Issue Date)

2025-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100494061>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100494061>



セレスタン・フレネによる学習文庫の変遷

- 1932 - 54年を中心に -

Changes in the “ Working library ” by Célestin Freinet

- Focusing on the years 1932-54 -

枝廣 直樹*

Naoki EDAHIRO*

要約：本稿は、セレスタン・フレネによる学習文庫の変遷に着目し、フレネの提唱する「興味の複合」の実践的特徴を考察した。学習文庫について、第二次世界大戦前（1932-39年、33冊）と大戦後（1946-54年、221冊）に分けて内容の変遷を数的・質的に検討した。その結果、（1）形式の固定化、（2）子どもの興味の重視、（3）学習内容網羅性の重視という3点の変化を指摘した。「興味の複合」に合わせて考えるに、「興味の複合」理論の特徴として指摘されている、多数性、多様性を満たす変化を見せているものの、不確実性、共可能性という点では、学習文庫の変遷を見る限りでは指摘ができなかった。今後、同時代の作文集、協同的学校カードといったフレネ教育技術と合わせながら、フレネ教育技術の持つ「興味の複合」としての特徴について考察したい。

キーワード：学習文庫, 興味の中心, 興味の複合, フレネ教育, 初等教育

1. 研究の目的と方法

本稿は、セレスタン・フレネ（Célestin Freinet, 1896-1966）による学習文庫（bibliothèque de travail）の変遷の比較・検討により、「興味の複合」の実践的特徴について考察することを目的とする。

学校を「劇的と言えるほど興味の存在しない世界¹⁾」と感じたフランスの公立小学校の教師フレネは、1923年、自身の教室に印刷機を導入し、子どもたちの興味に基づいた作文を推敲、印刷する「自由テキスト」の実践を始める。遠く離れた他校との交流を始めたフレネは、1926年に各学校で印刷されたものを一冊にまとめた作文集を発行する。1929年、学習内容を一枚ずつカードにまとめた協同的学校カードの発行を開始する。1932年にはカードを冊子にまとめた学習文庫を発刊する。1940年頃、フレネはドクロリー（Decroly O.）の提唱する「興味の中心」が実際の運用において学級全体の興味を一つにまとめていることに異議を表明し、「興味の複合」を提唱する²⁾。彼は1950年代から「興味の複合」の実践的具體化を推し進める。1965年に発表した論考「興味の複合の教育的開拓」では、自身の推し進める現代学校の基礎の三本柱に「興味の複合」の

具體化を措いている³⁾。

宮ヶ谷（1986）や坂本（2001）が指摘するように、フレネは「興味の複合」に対して必ずしも明確な定義を与えていない⁴⁾。フレネは1961年、自分達の教育学の教育的基礎となるのは興味ではなく、強い興味を可能にする学習条件は何かということをも方法論的に研究する必要があると述べているように、興味そのものよりも、興味を可能にする実践のあり方を重視している⁵⁾。つまり、「興味の複合」について明らかにするためには、フレネが行った実践を考察する必要があるが、フレネの「興味の複合」理論が、当時の実践の内容と変遷にどのように関連していたか十分に研究された例は見当たらない。

また、フレネは第二次世界大戦中に主著とされる本3冊を著し、戦後に発表すると共に、「興味の複合」の主張を展開し、フランス国内外において実践を拡げていった⁶⁾。「興味の複合」は先述のように、「興味の中心」の批判的継承から概念を形成したと考えられるが、枝廣が指摘するように、フレネの「興味の中心」への態度は、大きくまとめると、実践面での「否定から部分的容認への移行」というものである⁷⁾。この変化に対して、当時の実践の変遷がどの

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士後期課程院生

（2024年9月18日 受付）
（2025年1月29日 受理）

ように影響したか指摘した論文は見当たらない。

特に「興味の複合」の教育的開拓に関わったと考えられる教育技術は、作文集、協同的学校カード、学習文庫の3点が挙げられる。枝廣(2024)は、作文集、協同的学校カード、それぞれについて、その内容と第二次世界大戦前後における変化の特徴を描き出している⁸。しかし、学習文庫について検討したものは見当たらない⁹。学習文庫は多岐にわたるフレネ教育運動の教育技術の中でも主要な学習媒体とされ、フレネ教育を代表する技術である。学習文庫の変遷を考察することで、「興味の複合」の教育的開拓がいかに進められたか検討することができる。と考える。

以上の理由から、学習文庫の内容と変遷を検討することで、フレネが行った「興味の複合」の教育的開拓の意義について考察したい。

本稿において、学習文庫の戦前と戦後の特徴の変化の分析を行う。分析は、本の形式や内容の数値の変遷をまとめた量的研究と内容の分析から変遷を比較した質的研究の両方の手法で行う。さらに、明らかとなった特徴と、これまでの「興味の複合」の論を掛け合わせることによって、「興味の複合」とは一体どういったものであったのか、なぜフレネは部分的な変更を加える必要があったのか、考察を加えたい。

ゴ(Go N., 2022)は、「興味の複合」の特徴について、予期せぬ、計画されない出現(不確実性 *aléatoire*)と、多様性(*diversité*)、多数性(*multiplicité*)、共可能性(*compossibilité*¹⁰)を挙げている¹¹。こうしたこれまで指摘されている特徴を実践の内容と比較し、フレネの理論が実践と関わりながらどう誕生し、どう変遷していったか考察したい。

2. 学習文庫の変遷の分析

「興味の複合」の教育的開拓の分析のため、フレネ教育技術の「興味の複合」の実践の1つである、学習文庫について、第二次世界大戦前(1932-39年、33冊)と大戦後(1946-54年、221冊)に分けて考察する¹²。

2-1. 学習文庫の基礎情報

学習文庫の基礎情報は以下のとおりである。先述の通り、1932年にフレネとその仲間たちにより作られた資料集であり、片付けやファイリングが難しい協同的学校カードのデメリットを払拭するものとして生み出される。23×15cmを基本的な形としていく。調査、報告、インタビュー、生徒の文章、研究に基づいており、子どもの興味に基づくものであることを基本的なコンセプトとしている。学習文庫を活用するため、現代学校研究所は、それぞれの学習文庫の発行前に、著者だけでなく、試し読みに

より内容を確認する他の教師や生徒を動員した。

1957年に学習文庫サプリメント(BTの補足)、1960年には学習文庫Son(サウンド・ドキュメント)が発刊される。1965年、学習文庫(BT)(6歳以上対象)と学習文庫2(BT2)(中学生対象)の2つに分けることが決定された。1932年に創刊された「Bibliothèque de travail」は、現在1181号まで発行されている。また、2006年10月、出版社の消滅に伴いシリーズは終了、現代学校協同組合出版のBTJ、後にEncycoopに引き継がれた。

2-2. 学習文庫の誕生

1930年、Office de Documentation historique et archéologique創設者の古文書家、カルリエ(Carlier A.)が協同的学校カードへの協力を申し出る。彼は自身のアーカイブから8万点の文書を支援、まず、本の歴史とパンの歴史について、2シリーズ30枚を提供した¹³。カルリエの提案に支えられたフレネは、本、パン、鉱山、鍛冶場、自動車、暖房などに関する、豊かでしっかりとした表現、豊富な図版、有益で興味深い形式の30~40頁のパンフレットの構想を打ち出していた。カルリエが作成し1932年2月に発行された第1号「Chariots et carrosses(荷車と馬車)」の成功により、この時期の学習文庫は40年以上にわたり再版されることとなる。第22号まで、在庫費用と郵便費用の問題から、新刊発行のペースが落ち、協同的学校カードをまとめた形のパンフレットを学習文庫として発行したり、1935-37年に新刊の発刊を停止したりするなど、戦前は発刊ペースが遅い(約8年間で33冊)。戦後は週刊のペースで発行を続け(約8年間で221冊)、フレネ教育運動の主要な学習媒体となっていく。

2-3. 学習文庫の変遷1(頁数と頁内容)

カルリエは学習文庫の第1-3号の著者となり、戦前13冊(33冊中)、戦後28冊(221冊中)計41冊の学習文庫を作成している。

1932年2月に発行された第1号「Chariots et carrosses(荷車と馬車)」は24頁であり、項目が4つある。その後も24頁が続くが、第16号「このとり」は16頁、第17号「演劇の歴史」は30頁で、それぞれの頁に項目がつけられ、各頁に絵や写真が付けられるようになる。カルリエの学習文庫の頁数は平均で29頁となっており、カルリエ作の学習文庫の75%以上が、30-32頁である。学習文庫全体の頁数平均が25頁であり、他の作品や学校が学習文庫作成に協力した記述や生徒が参加した記述のある作品と比べても、特に多い(表1)。カルリエは多くいる学習文庫の著者の中でも突出して作成数が多いことから、戦前や戦後のすぐに集中して発刊していることから、カルリエの作品が他の学習文庫のひな型となったと考えられる。本綴じの形態上都合が良

表 1 学習文庫の頁数の変遷

平均ページ数	全作品	カルリエ	除カルリエ	学校参加
前半	24.5	27.9	22.3	22.8
後半	25.2	29.5	24.6	24.3
全体	25.1	29.0	24.3	24.1

かったと考えられるが、24 頁、32 頁程の作品が多く、後半の作品はほとんどが 24 頁となっていく。

1932 年 10 月発行の第 5 号「カビル村」は全 16 頁で、項目が 16 ある。つまり、1 頁に 1 項目となっている。戦前の作品は項目が頁をまたがるものも多いが、戦後の作品はほぼ 1 頁に 1 項目の形になっている。1 頁に項目のタイトル、文章、絵（写真）が入っているという形態は 1929 年に発行された協同的学校カードと同じである。つまり学習文庫は同種類の協同的学校カードを 24 枚集めたもの、という形態を獲得していく。

2-4. 学習文庫の変遷 2（学校、生徒参加）

1932 年 10 月発行の第 4 号、つまりカルリエ以外の作による学習文庫は小学校教師によるものであった（「アルプスにて」）。以降も学校が作成に深く関わる作品は多く発刊される（表 2）。

表 2 学校参加・生徒参加の学習文庫数と割合の変遷

	全部	学校参加	割合%	生徒参加	割合%	学校・生徒参加	割合%
前半	33	9	27.3%	0	0.0%	9	27.3%
後半	221	54	24.4%	15	6.8%	67	30.3%
全体	254	63	24.8%	15	5.9%	76	29.9%
増減	188	45	-2.8%	15	6.8%	58	3.0%

1938 年フレネは「学習文庫コレクションをより柔軟なものに」と題した論文を残している。ここで彼は、彼の組合に面白いが数頁に収まらない文書が多く届くことに触れ、「麦束」「童心」といった作文集も含めた新たなツールを用いた学校の協力を呼びかけている¹⁴。99 号「海は広い」はオーブ県の生徒たちが学校間通信相手のフィニステール県のペンフレンドを訪ねた際にまとめたものとある。197 号「バッタ」にはアルジェリアやモロッコを含む 6 校の学校の調査を集めた作品となっている。233 号「小さなブルトン人コランタン」は学校間通信により寄せられた質問から生まれたという記述がある。学校による調査が学習文庫となる割合は初めから継続して多くあり、戦後はより多彩な形態をとっている。

戦前においては全く確認できなかった、生徒年齢の記載されたものが戦後に多く見られるようになる。例えば 253 号「サソリ」には 12,13 歳の子どものサソリにまつわる体験が記載されている（図 1）。しかし、ここでの子どもの参加は作文の引用に留まり、「サソリに刺された」という作文の前後には、「アメリカサソリの駆除に関する調査」「収集されたサ

サソリに刺された

ある日の午後、マットの上で横になっていた私は (1)、サソリに刺された。突然の激痛に襲われた私は、母に「背中を見て、何か刺されている」と言った。母は顔を上げると、「危ない、背中にサソリがいる！」と叫んだ。

私は素早く起きて服を揺り動かした。サソリは落ちた。私は大きな石を掴んでそれを押し潰した。

私は少し心配になったが、母は「何でもないから、市場まで走ってコーヒーを買ってきなさい (2)」と言って私を安心させた。

しばらくして、全身にちくちくと痺れる感覚があり、刺された部分が青くなった。

ソウイカ（市場）から戻ると、私は強くて苦いコーヒーを飲み、それから病院で注射を打ってもらった。

クリム・アブデルカデル 13 歳 (CM.2)



(1) アラブ諸国では、貧富の差に関係なく、ヨーロッパのようにベッドの上ではなく、カーペットやマットの上で寝る習慣がある。(2) 毒が心臓に早く到達するのを防ぐためには、走らないことが重要である。したがって、噛まれたばかりの子供を、特に一人で市場に行かせるのは賢明ではない。

図 1 学習文庫 253 号『サソリ』14 頁「サソリに刺された」

ソリはどうなるのか」という組合員が作成した統計的な文章がある。子どもの文章は具体例を示すに留まり、全体的な作成はあくまで学校協同組合¹⁵による。

また、戦前には確認できなかった学習文庫参照、協同的学校カードの参照も戦後に多く見られるようになる（表 3）。学習文庫の数が増えれば学習文庫

表 3 学習文庫における、学習文庫参照数と協同的学校カード参照数の変遷

	学習文庫参照数	協同的学校カード参照数
前半	0	0
後半	109	10
全体	109	10
増減	109	10

への参照が増えるのも当然と考えられる。一方で学習文庫に比べて協同的学校カードの参照が明らかに少ないことから、学習文庫使用時には学習文庫のみの使用を考える傾向、また、学習文庫のみで子どもの興味を繋いでいこうとする傾向があったといえる。

2-5. 学習文庫の変遷 3（内容分類）

フレネはラルマン (Lallemand R.) がまとめた 10 進法分類を採用し、さらに協同的学校カードに 1000 の分類を示している¹⁶。学習文庫にも同じ分類を採用したが、版により分類番号が記載されてい

ない学習文庫も多く、全体の分類を示した記録も見つけることができない。そこで、協同的学校カードの分類法に則りながら、分類を示したものが表4である。カルリエの作品を分類すると、内容分類では偏りや前後半のばらつきがある。また、学校が協力した記述のある作品は「9. 地理」「A. 国・地域」が多くなっている。この理由に、外国の学校と協力して作成した作品が多いことが挙げられる。全体としては、全ての分類に一定数の学習文庫が見られる(分類0を除いて各項目が全体の5.5%-13.9%のうちに収まっている)。カルリエの賄えない部分を他の学校協同組合員が補填していくなかで、学習内容に偏りのない作品作りが意識して進められていたことがわかる。

2-6. 学習文庫の使用法

前記のような学習文庫の変遷は学習文庫の使用法にどのような変化を与えただろうか。1937年発行の『民衆的新教育ブックレット』第1号には、学習文庫の豊富な使用法が記載されている。例えばフレネのクラスは15-20分の生徒の朗読から始まり、生徒は前日に学習文庫の抜粋などから自分の好きな朗読を準備する。高学年の自由時間には、動物や植物の研究、化学の実験、歴史や地理の研究に学習文庫を用いるとしている¹⁷。1938年の『民衆的新教育ブックレット』第3号には、子どもたちの学習研究発表の実現は協同的学校カードと学習文庫によってなされてきたとしている。さらに自己添削カード(fichers auto-correctifs)に必要不可欠なツールとして協同的学校カードと学習文庫は紹介されている¹⁸。自己添削カードは学習文庫などと共にフレネ教育運動により開発されたツールであり、自分で問題を解き進めていくカードである。フレネは自己添削カードの使用を反復練習が必要な科目(幾何、代数、文法、動詞など)に限定している。自力学習の際に自分で

分らない部分を調べるのに学習文庫が用いられている。フレネは学校印刷技術、自己添削カード、学習計画、学習文庫、協同的学校カードを組み合わせることで、授業や宿題を廃止した新しい公立学校の設立が目指せるとしている¹⁹。

1950年10月発行の129-131合併号「美しい鳥、君は誰?」では、図鑑の形で多数の鳥の絵が45頁に渡り収められており、子どもは街や森で出会った鳥をこの本により判別できるように作られている。1952年2月の181号「C.E.L シール (vignettes) I」にはカラーでよりわかりやすい鳥の絵が収められており、このシールを前述の学習文庫に貼り付けることでより鳥の分別ができるようになっている(図2)。1952年10月には「美しいキノコ、君は誰?」、



図2 学習文庫 129-131 合併号「美しい鳥、君は誰?」と181号「C.E.L シール I」による鳥の分類

1953年1月に「美しい植物、君は誰?」、同年「美しい化石、君は誰?」「美しい蝶、君は誰?」が発刊され、それぞれにカラーのシールも発行されている。1954年、197号「バッタ」を作成したマイヨール(Maillot G.)は機関誌上で、名前を覚える重要性を

表4 学校参加の作品、カルリエの作品、学習文庫全体における、内容分類の変遷

分類	私たちの仕事	自然	農業と食品	仕事・産業	貿易と輸送	社会	人とアイデア	算数・理科	歴史	地理	国・地域	計
カルリエ前半	0	0	1	1	4	2	3	1	0	0	0	12
%	0,0%	0,0%	8,3%	8,3%	33,3%	16,7%	25,0%	8,3%	0,0%	0,0%	0,0%	100,0%
後半	0	0	1	6	3	9	2	1	8	0	0	30
%	0,0%	0,0%	3,3%	20,0%	10,0%	30,0%	6,7%	3,3%	26,7%	0,0%	0,0%	100,0%
増減	0,0%	0,0%	-5,0%	11,7%	-23,3%	13,3%	-18,3%	-5,0%	26,7%	0,0%	0,0%	0,0%
学校参加前半	0	2	2	2	0	0	0	2	0	2	3	13
%	0,0%	15,4%	15,4%	15,4%	0,0%	0,0%	0,0%	15,4%	0,0%	15,4%	23,1%	100,0%
後半	0	6	11	11	5	4	2	8	5	20	21	93
%	0,0%	6,5%	11,8%	11,8%	5,4%	4,3%	2,2%	8,6%	5,4%	21,5%	22,6%	100,0%
増減	0,0%	-8,9%	-3,6%	-3,6%	5,4%	4,3%	2,2%	-6,8%	5,4%	6,1%	-0,5%	0,0%
全体	10	20	34	43	28	25	17	28	21	43	40	309
%	3,2%	6,5%	11,0%	13,9%	9,1%	8,1%	5,5%	9,1%	6,8%	13,9%	12,9%	100,0%
前半	0	4	5	7	6	3	3	3	0	4	7	42
%	0,0%	9,5%	11,9%	16,7%	14,3%	7,1%	7,1%	7,1%	0,0%	9,5%	16,7%	100,0%
後半	10	16	29	36	22	22	14	25	21	39	33	267
%	3,7%	6,0%	10,9%	13,5%	8,2%	8,2%	5,2%	9,4%	7,9%	14,6%	12,4%	100,0%
増減	3,7%	-3,5%	-1,0%	-3,2%	-6,0%	1,1%	-1,9%	2,2%	7,9%	5,1%	-4,3%	0,0%

指摘しながら、昆虫を彼の家を送ることで彼が昆虫を識別するというサービスを呼びかけている²⁰。こうしたことから子どもの個々の興味を止めない学習教材作りを目指す学校協同組合やフレネの意向が読み取れる。

1960年にフレネは、協同的学校カードと学習文庫を教室に欠かせないツールとし、フランスのすべての学校で使用が可能としている。学習文庫は子どもの興味を止めずに学習を進める媒体として確実にその内容を充実させ多様な使用法を獲得していった。

2-7. 学習文庫の変遷の考察

学習文庫そのものの戦前、戦後の変遷を見ることで、以下の3点が指摘できる。

(1) 形式の固定化

カルリエが作り出したと考えられる学習文庫の形式は他の作成者や教師の見本となっている。学校や個人生徒の参加の増加や、鳥やキノコの図鑑の作成など、子どもの興味を広げようとする作品が見られる一方で、学習文庫は学校協同組合独自に作成するか、組合に送付された学校作成の資料を24程度の項目にまとめて作成する形式を取っている。学校協同組合が主導して作成する方針は一貫している。

(2) 子ども（集団）の興味の重視

学校の参加が前後半を通して一貫してみられ、参加の形態も多様になっている。学習文庫は子どもの興味に沿って柔軟な作成をする傾向を持っていたといえる。また、生徒個人の参加も増加しているが、あくまで学校協同組合主導のものであり限定的である。大まかにいって、子どもの集団の興味は学習文庫に集約していったといえる。

(3) 学習内容網羅性の重視

学習文庫は前述のように戦前も戦後も分野ごとの作成数に大きな変化は見られず一定の割合に保たれている。例えば協同的学校カードに見られた昆虫や動物への偏りは学習文庫にはなかった。つまり学習文庫には、子どもの興味に沿ったものを作ることも、全ての学習分野を網羅することを優先する傾向が見られる。

3. 考察と今後の展望

以上のような特徴は「興味の複合」とどのようにつながるのであるのか。例えば「興味の複合」の特徴である、多様性、多数性は子どもの興味の重視や学習内容網羅性の重視といった傾向から学習文庫にも同様に見られる。また、フレネは晩年（1960-66）において、「興味の中心」の実践的運用を特に低学年において部分的に容認している²²。本能に沿った興味の中心への移行について、戦前のフレネは子どもの多様な興味を1つの興味に固定することを強く

批判する向きもあった。戦後の学習文庫に見られる子どもの興味と学習内容網羅の重視の両立は、特に低学年において、子どもがある程度強制された興味に移行することを容認するフレネの態度と合致する。学習文庫は、子どもの興味を絶やさずに既存の学習内容を押さえることのできる媒体としての位置を獲得していったといえる。

しかし限界もある。以上のような学習文庫の内容と変遷の分析のみでは、フレネが「興味の複合」の教育的開拓を自身の教育の三本柱に据えた理由が十分に説明できない。また、これまで挙げられている「興味の複合」の特徴である、予期せぬ、計画されない出現（不確実性）や共可能性（個人化された仕事時間に共存する）は、学習文庫だけでは十分に説明できない。さらに言えば、子どもの興味の重視と学習内容網羅の重視の両立は矛盾していると捉えることもできる。二点の重視の両立が可能かどうか検討するには、他の教育技術との関わりの考察が必要である。

以上を含め、作文集、協同的学校カードといった他のフレネ教育技術の連関から、フレネの提唱する「興味の複合」理論の意義について論じることは今後の課題としたい。

¹ Freinet C., « Les techniques freinet de l'école modern », *Armand Colin*, 1964 (石川慶子、若狭蔵之助訳『フランスの現代学校』明治図書、1979年、57頁)。

² Freinet C., « Textes libres et Centres d'intérêts », *L'Éducateur*, n° 6, 1947, pp.122-125. 「興味の中心」は子どもに与えられる全ての知識を各人の主要な欲求に基づいて再編成する概念である。ドクロリーは基本に据えられる欲求を、1. 食物を摂取する、2. 天候などの不順と闘う、3. 敵や障害から身を守る、4. 連帯して仕事をする、休養する、気晴らしをする、の4つの中心 (centres) に据え、子どもが示す興味を元に、合科 (複雑) から教科 (単純) へと、活動的な学びを展開させる方法を考案した。Decroly O., « Vers l'école rénovée, 1921 », « Le traitement et l'éducation des enfants irréguliers, 1925 », « La fonction de globalization et l'enseignement, 1929 », Hamaidé A., *La Méthode Decroly*, 1966 (齋藤佐和訳『ドクロリー・メソッド』明治図書、1977年)。

³ Freinet C., « L'exploitation pédagogique des complexes d'intérêt », *Dossier pédagogique de l'École Moderne* n° 9, 1965, p.1.

⁴ 宮ヶ谷徳三「フレネの教育思想の形成と展開」『仕事の教育』明治図書、1986年、94頁。坂本明美「セレスタン・フレネにおける「興味の複合」の試み—1920年代～1950年代を中心に—」『フランス教育

学会紀要』第13号、2001年、25頁。

⁵ Freinet C., « L'Exploitation pédagogique de nos complexes d'intérêt », *L'Éducateur*, n° 3, 1961, p. 3.

⁶ Freinet C., *L'Éducation du travail (1^{ère} édition 1946) Un puissant besoin de travail*, éd, Delachaux et Nistlé, Neuchâtel, 1967. Freinet C., *L'école moderne Française*, Rossignole, 1946, Freinet C., *essay de psychologie sensible*, 1968.

⁷ 枝廣直樹「セレスタン・フレネの興味観の変遷」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要第18巻・第1号』神戸大学大学院人間発達環境学研究科編、2024年、31-32頁。

⁸ 枝廣直樹「フランスの作文教育－フレネ教育の作文集における「著者」の問題－」『教育科学論集』神戸大学大学院人間発達環境学研究科『教育科学論集』編集委員会編、2024年、7-14頁。枝廣直樹「セレスタン・フレネによる『興味の複合』の具体化－協同学校カードの実践を中心に－」『教育新世界』世界新教育学会編、2024年、32-42頁。

⁹ 論文の一部には言及がある。例えばミシェル・バレは、学習文庫について歴史的な変遷を踏まえながら、子どもの質問に対応した文書が提供できるという学習文庫の利点を挙げている。一方で子どもの質問に対してモザイク的な捉え方になってしまい、全ての要求に答えられないという学習文庫の欠点を指摘している。Michel Barré, *Célestin Freinet vers nue alternative pédagogique de masse 1936-1968 tome 2*, PEMF, 1996, p. 405.

¹⁰ 共可能性 (compossibilité) はライプニッツの存在論における基本概念の一つ。概念が互いに矛盾を含まない個体は同一世界に共存することが可能であり、この可能的な個体からなる世界が最善世界の選択の候補となる (佐々木能章『哲学・思想事典』岩波書店、1998年、338頁)。

¹¹ Go N., « Pour l'École moderne La pédagogie Freinet aujourd'hui », *Chronique Sociale*, 2022, p.31.

¹² 第二次世界大戦前と後に分けて分析するのは、先述のようにフレネは第二次世界大戦において主著とされる本を著し、その中で「興味の複合」を主張するなど理論の変更が見られるからである。第二次世界大戦の影響により、1940-45年の学習文庫の発行はなかった。学習文庫は現代学校協同組合 (I.C.E.M) ホームページ (<https://www.icem-pedagogie-freinet.org>)、発表者の4度にわたるフランス現地調査、図書館・資料館での収集、直接購入などにより入手した。

¹³ Barré M., *Célestin Freinet un éducatuer pour notre temps 1896 - 1936 Les années fondatrices*, PEMF, 1996.

¹⁴ Freinet C., « Pour une formule plus souple de la

Collection Bibliothèque de Travail », *L'Éducateur prolétarien*, n° 4, 1938, p. 78.

¹⁵ 1928年にパリで行われた学校印刷機会議において、非宗教教育協同組合 (C.E.L) が発足。1947年には「フレネがC.E.Lを営利企業にしようとしている」とする陰謀論に対抗し、現代学校協同組合 (I.C.E.M) が設立される。フレネは1946年からカンヌに定住し、協同組合の運営に深く関わる (cf. Connac S., « Les Pédagogies Freinet », Eyrolles, 2021, p. 33-36)。

¹⁶ ラルマンは「すべての分類のために (pour tout classer)」として10の分類をもとにしてすべての興味を個々が分類できることを目指した。分類は以下の通りで、各数字はさらに細分化される。また、アルファベットは他の数字の分類と併記される。0. 私たちの仕事、1. 自然、2. 農業と食品、3. 仕事・産業、4. 貿易と輸送、5. 社会、6. 人とアイデア、7. 算数・理科、8. 歴史、9. 地理、A. 国・地域。さらに1964年にラルマンはよりはっきりと個々が分類できるよう以下の新しい分類 (nouveau pour tout classer) を発表した。0 私たちの仕事、1. 自然環境、2. 植物、3. 動物 (動物学)、4. その他の科学、5. 農業・食品、6. 仕事と産業、7. 都市と貿易、8. 社会、9. 文化・娯楽、H. 歴史、G. 地理 (cf. Belperron R., « Le fichier scolaire documentaire », *Bibliothèque de l'École Moderne* n° 33-34, 1965.)

¹⁷ Freinet C., « La technique Freinet », *Brochures d'Éducation Nouvelle Populaire*, n° 1, 1937, pp. 5-22.

¹⁸ Freinet C., « Plus de leçons », *Brochures d'Éducation Nouvelle Populaire*, n° 3, 1938, pp. 18-23.

¹⁹ Freinet C., « Fichier scolaire coopératif », *Brochures d'Éducation Nouvelle Populaire*, n° 5, 1938, pp.18-19.

²⁰ Maillot G., « Services d'identification », *L'Éducateur*, n° 12, 1954, p.502.

²¹ Freinet C., « Le texte libre », *Bibliothèque de l'École moderne* n° 3, 1960, p. 24.

²² 枝廣前掲書「セレスタン・フレネの興味観の変遷」、28-32頁参照。フレネは「『興味の複合』の強さは、学級と子供たちの年齢によってかなり異なる」とし、幼児学級、1年生 (C.P.) と2・3年生 (C.E.) は、「興味の中心の開拓」がほとんど永続的であり、教育全体を活気づけるとしている。その後、4・5年生 (C.M.) では、「この『興味の複合の開拓』は学級に応じて変化する」としている (cf. Freinet C., « L'exploitation pédagogique des complexes d'intérêt », *Dossier pédagogique de l'École Moderne* n° 9, 1965, p. 1)。